

連載

熱海市立図書館 100年のあゆみ

第5回 図書館 波乱の再スタート

問い合わせ：熱海市立図書館
☎0557(86)6591

戦争のため昭和13年から一時閉館していた旧御用邸1階の図書館は、昭和19年8月に開館しました。しかし、収蔵していた図書を戦禍から守るため、伊豆山神社をはじめ熱海高等女学校や市内のお寺に図書を分散して疎開させました。そして、昭和21年に分散していた図書を集め、改めて図書を整理し再び開館しましたが、館外貸し出しは行いませんでした。

当時の一日平均閲覧者は男性29人、女性6人程度と記録されています。昭和22年、簡易裁判所が旧御用邸1階を使用したため、図書館は2階に移転しました。当時の蔵書数は8821冊、記録によりますと「図書閲覧の傾向では百科事典の利用が群を抜いて多いが、小・中学生にはやや難しく、最近玉川出版部で発行中の『学習大辞典』を非常に喜んで見て居る」と記されています。

昭和25年の熱海大火後、図書館は青年会館に移転、そして、昭和28年、新熱海市役所落成に伴い、図書館は6階に移転、狭いながらも「市立熱海図書館」として再スタートしたのです。蔵書数は1万3951冊、一日利用者数は平均178人と大幅に増加しました。

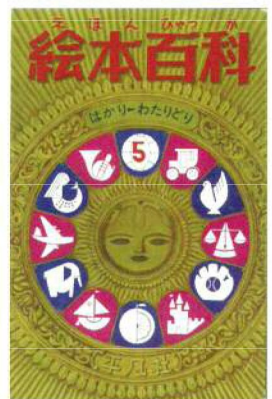


混雑した市庁舎での図書館

この年から家庭で気軽に図書を手にし、家族の心の交流と生活の充実にし、子どもの情操教育の向上を目的として「お茶の間図書館活動」が開始されました。グループ単位の貸し出しを行っていたので、毎月一回、グループの代表者宅や図書館で図書の交換が行われ、市内の読書人口の広がりへと進みました。

昭和38年の「図書館だより」に、「私の読んだ一冊」として25冊の本が紹介されています。その内の2冊を紹介します。

- ・ 絵本百科第五巻（平凡社）
さまざまなる事柄を写真を使わずに絵だけで描写しています。
- ・ 五番町夕霧楼（水上勉著）
遊女の生涯を描いた名作です。



（昭和38年初版）

市民の皆さんも、以前に読んだ本として懐かしく感じられるのではないのでしょうか。

家庭の中に徐々に浸透してきた読書への関心ですが、もう少し深く図書に親しんでもらおうと、昭和39年に「文学観賞講座」を開講しました。最初の講座は、現代詩集を研究していた静岡大学教授であった江頭彦造氏による、「平安女流日記文学」についてでした。

この講座は、後に「文学講座」と名を変え、石川啄木を研究した岩城之徳氏、斎藤茂吉研究の権威である藤岡武雄氏など多くの有名な講師を招き、図書館の名物企画となりました。毎回多くの市民が参加し、文学の魅力を学びました。

蔵書数も3万1598冊となった市庁舎6階の図書館。利用者の増加や各種企画の開催ともない、市庁舎の一室での図書館運営は困難を来すようになり、市民の間からも、学びの場である専用の図書館の建設を望む声が高まってきたのです。

市長メッセージ 92

田邊前副市長の帰任

熱海市長 齊藤 栄



6月30日、田邊前副市長が4年の任期を終え、出向元の経済産業省へ帰任しました。当日は、多くの市職員、市議会議員、市民の皆さんに市役所の玄関で見送られ、抱えきれないほどの花束を抱えた彼の姿に私も感動しました。

副市長は市職員を束ねる事務方のトップであり、市長の片腕となる重要な役職です。

田邊さんは副市長としては33歳という全国最年少級の若さで、しかも熱海という新たな土地での就任。苦勞が多かったと思いますが、多くの実績をあげてくれました。

年間100件を超えるロケ誘致を成功させている「ADさんいらっしやい」や、事業者に新商品開発・販路拡大などのビジネス支援を行う「A・B・I・Z（エービズ）」などは彼の力がなければ実現しなかったでしょう。心から感謝しています。

そして、何より最大の功績は「挑戦する文化」を熱海市役所に持ち込んでくれたことです。これは経済産業省が持っている文化であり、行政も常に新しいことにチャレンジし、まず一步を踏み出そう、走りながら考えようという姿勢です。職員の模範となるよう、先頭に立ってこの姿勢を貫いてくれました。

7月1日、新たな副市長として森本要さんが就任しました。再び経済産業省からの出向で、千葉市出身の36歳、市役所などの基礎自治体での勤務を希望していました。熱海市には人口減少をはじめ多くの課題があります。新副市長と二人三脚で、引き続き新たな挑戦をしてまいります。